

いかにも過激な内容なので、「ぎゃーてるみねっせんす」というソフトな雰囲気フォントを使用してみました。この文章はあくまでも柳沢克央個人の見解であり、上田仮説サークルの公式見解ではありません。

「アクティブラーニング」は

たわごと なんご 戯言または喃語に過ぎない

やなぎさわかつひろ
柳沢克央（上田仮説サークル）

2017年2月9日（木）午前11時50分頃、私は教室で生徒たちに課題を与えて自習させながら、生徒たちから回収した化学実験レポートの添削をしていた。この作業に深く集中している最中に、思いがけず文部科学省が提唱している「アクティブラーニング」が全く無意味なスローガンに過ぎないことを明確に認識するに至った。次にその経緯を述べる。

*

本来、学習（ラーニング）というものは主体的、能動的な精神活動である。したがって、「パッシブラーニング（受動的学習）」というものは原理的にあり得ない。すなわち、改めて言うまでもないが、学習とはその本来の意味において必然的にアクティブなものである。

従来、受動的な学習と考えられがちであった聴講、黙読、筆写などの学習方法も、正しく行われるならば十分に能動的な学習になることが忘れられているのではないか。もしそうだとするならば、それは危険なことであると言わねばなるまい。

「アクティブラーニング」という言葉は、「空飛ぶ飛行機」、「白い白墨」、「日本手ぬぐい」、「いちばん最初に」などと同様に推敲の甘い「重複表現」に過ぎない。それと同時に、この言葉はそれを用いる者やその追従者の授業に対する認識が、その程度のものであることを示す、何よりの証拠になっているのである。要するに「馬鹿丸出し」である。「馬鹿が百人集まると百倍馬鹿になる」（山本夏彦）という箴言が想起される。文部科学官僚にこれが適用できるかどうかは不明である。

*

私は断言する。「アクティブラーニング」は基本的に眉唾物であり、まともな教育関係者が全く取り組むに値しない空疎なテーマであることを。

私は予言する。「アクティブラーニング」という言葉を用いた書籍・論文の類は再現性を保証したものでない限り全く役に立たず、深追いすればするほど時間と労力と資源の無駄遣いになることを。

結論はタイトルの通りである。「アクティブラーニング」よ、サヨウナラ。「蒟蒻問答」の季節は終わった。私をこの決然たる結論に導いてくれた篠ノ井高校生の極めて熱心で黙示的な学習態度に深甚なる敬意を表しつつ、ここに筆を擱く。

（2017年2月10日（金））

（メールや封書だと担当者に握りつぶされればそれきりになってしまう。この文章をハガキ2枚にわたって手書きで書き写し、「文部科学省アクティブラーニング担当者様」という、最も「たらい回し」にされそうな宛先を書いて投函した）